

造化二神

天地生成であらわれた「万物の祖」

姿や形もない

「独神」とは

『古事記』は、天地開闢からはじまっている。

宇宙は最初、天も地もなく混沌としていた。やがて、天と地がわかれた。そのとき、天上界である高天原にはじめて出てこられたのが天之御中主神である。

次に高御産巢日神、その次に神産巢日神である。

この三柱の神は、男女の区別がない独神であり、また、姿や形がなかった。

『古事記』序文によれば、三神は「造化三神」とよばれている。

三神のうち、最初に出てこられた天之御中主神は、天の中央に位置し、高天原の主宰神と解された。すべての創造を司る全知全能の至高神と説かれたりもする。しかし、この神は、『古事記』にだけ見られ、「天地の初発の時」に登場し

ただけで、以後どこにも登場してこない。

次に出てこられた二柱の神は、一對の神格をなし、ともに「産す霊」の神である。「むす」は息子・息女の「むす」あるいは「若むす」の「むす」と同意で、ものを生成発展させる霊力をもつ神である。

なお高御産巢日神は、後に天孫が地上に降りる際に活躍し、また初代天皇である神武天皇の東征の手助けをするなど、神々の指導的な役割をはたしている。

次の神産巢日神は、五穀の種を広める神話に登場するなど、食物を中心とした生産に携わる神であったようで、出雲の国造りにも影響を与えた神としても知られている。

北極星信仰が結ぶ

天之御中主神と妙見さん

天之御中主神はすべてを司る至

高神という考えからか、中心的神格をもつ神に据える神道教も見られる。

しかしながら、あまりにも庶民には遠い存在だったようだ。そのような理由から古代においては、天之御中主神を祭神にした神社は一社もなかった。

それが中世、そして近世になると、天之御中主神は、神が仏の姿をしてあらわれる神仏習合の一例として「妙見菩薩」と習合した信仰が生まれ、庶民に親しまれるようになった。それを結びつけた根底には、北極星に対する信仰があった。

そもそも天之御中主神の「天の中心の最高神」という観念は、中国の道教の影響ともいわれ、その背景には、天帝を意味する北極星信仰などが見えかくれしている。

他方、中世以降、日蓮宗における妙見信仰も、北極星が神格化

神格・神徳

別称:	[天] 妙見菩薩、[高] 高皇産靈尊・高木神、[神] 神皇産靈尊
神格:	[天] 宇宙の根源神、[高] 生成力の神、[神] 生成力の神
神徳:	[天] 招福・技術向上など、[高] 開運招福・縁結びなど、[神] 豊作・縁結びなど
神社:	[天] 岡太神社(兵庫県西宮市鳴尾町)、太田神社(福島県原町市中太田)、[高] 安達太良神社(福島県安達郡本宮町)、[神] 安達太良神社・八所神社(山形県東置賜郡川西町)

された妙見菩薩を崇めたものだった。

こうした北極星を基底にして、天之御中主神と妙見菩薩は習合したようである。このようなことで、天之御中主神は妙見菩薩の姿をかりてあらわれることになり、武士や船員などの信仰を集め、さらには庶民にも親しまれるようになったのである。

実際、この神と仏の神仏習合の例を顕著に示す神社がいくつも見られる。

妙見信仰で知られる埼玉県の秩父神社では、明治の神仏分離令が出されるまで妙見宮とよばれた。

こういった例証はほかにもいくつもあり、その「妙見」は、長寿、息災、招福のご利益があるとされ、さらには眼病の神としても信仰されている。

なお、高御産巢日神と神産巢日神は安達太良神社(福島県安達郡本宮町)などにまつられている。

神世七代の神々



〔「万物雛形画譜」国立国会図書館蔵〕

本居宣長と『古事記伝』

『古事記伝』再稿本(全44冊)



『古事記』の全注釈書で、宣長が35年の歳月をかけて寛政10(1798)年、69歳のときに完成させた畢生の大著
(本居宣長記念館蔵)

本居宣長六十一歳自画自賛像



寛政2(1790)年8月に描かれたもので、国指定重要文化財。賛には「しき嶋のやまところを人とは朝日ににほふ山さくら花」の歌が書かれている
(本居宣長記念館蔵)